

いわゆる「プラン問題」再考

OZAWA, Mitsutoshi / 小澤, 光利

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

77

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

415

(終了ページ / End Page)

425

(発行年 / Year)

2010-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006055>

いわゆる「プラン問題」再考

小澤光利

目次

はじめに

I. 「経済学批判」体系標準プラン

II. 「プラン問題」の展開

1. 問題の提起(ないし再提起)→展開期

2. 再展開→分極期

3. 反省→発散期

III. プラン問題と宇野「三段階論」

IV. プラン問題の成果

むすびに

はじめに

総じて科学がその対象に応じて自からの方法を規定されている限り経済学もこの例外ではないが、ことさら経済学の「方法」が問題とされる場合には、それをおおむね理論研究の混迷状況（現実の対象と理論とのギャップ）の反映とみてよい。対象の特殊歴史的な性格ゆえに、社会経済的な現実の発展があらたな理論的課題の解明を要請するに至って「唯物論的基本見地に少しも劣らない一成果」とまでいわれたかの「マルクスの経済学批判の根底をなす方法」⁽¹⁾にたち戻り、そこに転変常なき混沌とした現象複合へ挑む「導きの糸」を再発見しようとしたこと、わが国の戦後マルクス

経済学研究史を特殊に彩るいわゆる「プラン問題」の基本的位置は、先ずこの点に求められる。

周知の如く、「プラン問題」の起点は戦前期の〈マルクス恐慌論の確認〉をめぐる問題提起（久留間鮫造「マルクスの恐慌論の確認のために」1930年初出）、『増補新版恐慌論研究』1965年再録⁽²⁾に遡るが、戦後になって本格的展開をみた諸論議は一定の収斂方向を見いだすことができず、むしろ論争の内実・領域両面の混沌を刻み、「問題」自体を無意味なものとして排除しようとする主張すら散見されるまでにいたった。

本稿の課題は、かつて筆者自身を取り扱ったことのある「プラン問題」について、30年余を経た現時点において、方法論的に省察することである。

I. 「経済学批判」体系標準プラン

1857年恐慌の進展するさなか、同年夏ごろの執筆と推定される「経済学批判序説」に最初の表現を見だし、「経済学の要綱」（「7冊のノート」）のうちに複数のヴァリエント（variant）で明記され、ラサールおよびエンゲルス宛に告げられた出版計画（1858年3月11日、4月2日）においてほぼ固まったとみなしうるマルクス「経済学批判」の体系＝「篇別」構想は、少なくとも1861年の時点では、こうであった。⁽³⁾

「経済学批判」体系標準プラン

第1部 資本

第1篇 資本一般

第1章 価値（商品）	序章
第2章 貨幣（貨幣または単純流通）	〃〃
第3章 資本（資本一般）	主章

I 資本の生産過程

1) 貨幣の資本への転化

2) 絶対的剰余価値

3) 相対的剰余価値

4) 本源的蓄積

5) 賃労働と資本

II 資本の流通過程

III 両者の統一または資本と利潤・利子

第2篇 競争

第3篇 信用

第4篇 株式資本

第2部 土地所有

第3部 賃労働

第4部 国家

第5部 外国貿易

第6部 世界市場（と恐慌）

問題なのは、このプランが、「全体の混沌とした表象」から出発して分析（下向）によって獲得された抽象的諸規定から、「思考の道を通して具体的なものの再生産に」導く理論的把握、具体的表象の概念化に関するマルクスの「科学的に正しい方法」、すなわち「抽象的なものから具体的なものへと上向する方法（die Methode von Abstrakten zum Konkreten aufzusteigen）」⁽⁴⁾に基づいて構想されたという点である。つまり、「経済学批判プラン」はマルクスのいわゆる「上向法」の具体化、その適用であるということの確認こそが重要なのである。

上記の方法は、マルクス自身が、「経済学の方法」と題して「経済学批判序説（Einleitung）」において、唯一まとまった記述を残した箇所に明記されているものであって、その後、プランのヴァリエントはあるにせよ、そうした方法自体をマルクスが訂正あるいは廃棄した形跡はまったく見られない。本稿「はじめに」で「マルクスの経済学批判の根底をなす方法にた

ち戻り、そこに転変常なき混沌とした現象複合へ挑む導きの糸を再発見しようとした」と述べた所以である。

ところで、『資本論』成立史の梗概から確認されるのは、

1. たび重なる出版計画の変更にもかかわらず、「経済学批判」「要綱」執筆に当たって構想された「篇別」プランが、マルクス自身によって放棄されたという証拠はない。むしろ『資本論』の全体的草稿を書き終え、その第一部のみを独立刊行してからも、プランとの連繋は忘れられてはいない。—「第二卷 [すなわち第2・3部] では、なかなしく土地所有も分析されますが、競争はただその他の取扱いが必要とする限りで分析されるにすぎません」(1868年3月6日付け、クーゲルマン宛の手紙)。
2. 初発以来、当面の課題は全構想中「要綱の仕上げ」のみに限定されていた。『資本論』としての刊行計画が立案される頃(1862年末から1863年初め)以降、六部「篇別」全体への言及は消失し、マルクスは「資本の叙述のむすび、競争と信用」および「国家」を別として、他の諸項目については「既に提供されているものを基礎にして他の人々によっても容易に成し遂げられるでしょう」(1862年12月28日付け、クーゲルマン宛の手紙)とのべ、それら爾余の項目について自らの実現意図を放棄したかに見える。
3. 1865年末までの『資本論』の全体的草稿の仕上げにいたる過程は、当初プランの「資本一般」を基本的枠組みとする内容の拡充・豊富化・深化の過程であったが、『資本論』では「資本一般」の表現に替わって、「資本の一般的分析」、「資本の核心的構造の分析」が用いられるにいたった。

以上の点を踏まえたくうえて、「プラン問題」の展開を小括してみよう。

II. 「プラン問題」の展開

「プラン問題」の展開は、一貫して争点に明確さを欠き〈論争史〉として

の総括を困難にしているが、ごく大まかな特徴づけが許されるとすれば、大略三期に区分されよう〔以下、便宜上ここで収録書誌名を割愛したもののについては遊部久蔵編『『資本論』研究史』（ミネルヴァ書房、1958年）の巻末および復刻版の「追補」掲載のビブリオグラフィーに譲る。〕

1. 問題の提起（ないし再提起）→展開期

第一期は、問題の提起（ないし再提起）→展開期であって、久留間「確認のために」の復刻（1949/53年）を軸とし田代正夫「恐慌の現実的基礎について」、杉本栄一「近代理論経済学とマルクス経済学」（1946/49年）、同「恐慌総説」（1952年）によって代表される〈『資本論』における恐慌論の未完の確認とその具体化への志向〉—但し杉本の問題意識は多分に機能主義的性格が強い—と鈴木鴻一郎『『資本論』のプランについて』（1948年）、宇野弘蔵「経済学の方法」について」（1950年）、「『資本論』における恐慌理論の難点」（1952年）に見られる〈初期『批判』篇別プランの方法論的意義に対する拒否的対応と『資本論』の「原理論」としての完結性の強調〉との並立ないし対抗に端を発して、宮崎犀一『『経済学批判』の体系と『資本論』の対象領域』（1953年）と藤塚知義「恐慌論と利潤率低下法則」（1952年）との対立において明確化された〈『資本論』の実現範囲の確定—「資本一般説」と「三部門説」との対立づけ〉をめぐる時期である。

2. 再展開→分極期

1954年頃を境に「問題」は再展開→分極の第二期に移る。この転機をなすのが高木幸二郎「マルクスの経済学体系と世界市場恐慌」（1953年）と佐藤金三郎『『経済学批判』体系と『資本論』—『経済学批判要綱』を中心として』（1954年）であったと見てよかろう。この期の特徴は、（とくに1953年東独で公刊された『経済学批判要綱』を契機とする）資料考証の精微化を通じて『資本論』の叙述形式=内容の変化が着目・重視され、初期プラン不変を前提とする対象領域確定の視点からプラン変更の視点への転換が迫られたこと、これにともない、またソ連・東独の研究動向の影響もあっ

て、課題の重心がプランの、とりわけ恐慌論展開にとっての、方法論的意義に関する考究よりも〈『資本論』成立過程史〉という学史的関心に移動しつつあったことである。井出口一夫「マルクス体系プランにかんするノート—『資本論』準備・完成期」（1955/6年）は当該期の問題状況を反映している。この間、世界経済論、財政学、信用論など部門領域ごとの応用的な諸論議も続出したが争点は必ずしも明瞭とはいえず、そのまま第三の反省→発散期を迎える。

3. 反省→発散期

まず、遊部久蔵『『資本論』の具体化とプラン問題』（1957年）、同「プラン問題」（1958年）や宮本義男『資本論研究』（1958年）に見られる「問題」の小括・反省の試み—前者は対象領域確定に関してネガティブであり、後者はポジティブであるが、いずれも展望は混沌—を皮切りとして、60年代以降の試行錯誤的なそして価値分裂的な諸主張（後述の本間要一郎氏や入江節次郎氏の見地を含む）が生みだされた。この局面では、種瀬茂「経済学の体系と方法」『思想』No.471, 1963年）を除けば、恐慌論の具体化という当初の展望は影を潜め、かつ全体的研究動向は一層発散的で、捉えにくくなるが、便宜的に次の数条の流れに区別することができよう。

ひとつは、純然たる学史的・資料考証的な研究方向〈『資本論』成立史視角〉であり、二つ目に、個別領域ごとの論点発展（『経済学批判要綱』・『剰余価値学説史』・『資本論』の各段階ごとの相互対比）の視角—例えば、飯田裕康「マルクス信用論の展開過程」（慶大『経済学年報』⑧, 1964年）である。飯田氏によれば、従前の「プラン問題の伝統的立論の多くは無駄」であった（『資本一般』の体系と『競争』論, 『三田学会雑誌』第58巻第5号, 1965年, 119ページ）。

三つ目に、種々のヴァリエーションを含む方法論的な「問題」把握である。この最後の方向こそ当該「問題」の本来の課題でありながら研究に恵まれず、僅かに、国際経済研究会のシンポジウム「国際経済研究の理論的体系化に向けて」（『世界経済評論』Vol.10, No.3, 1966年）が広範囲にわたる

論点の集約に努めようとし、吉信肅「経済学体系と『資本論』」（『マルクス経済学体系』Ⅱ、有斐閣 1966年）が自からの総括を踏まえて展望を打ち出そうとしていた。この世界経済論研究の動向から生まれた杉本昭七「マルクス経済学の体系化に関する根本問題」（『経済評論』第16巻第2号、1967年）は、経済学批判体系の最終範疇が歴史段階ごとに変化するという指摘において、注目すべきではあっても、当初プランの意義検討を踏んでいない点で飛躍していた。

とまれ、当該「問題」の真の問題性は、つまるところそれが運動・発展・変化のうちにある経済的現実を対象として理論と歴史の相互関係—これは常に『資本論』をいかに現代的に再適用するか、『資本論』の具体化という形で問われることにもなるが—にどの程度回答しうるかということにかかっていたのであるが、この肝心な点において成果は乏しかったといわざるをえない。

Ⅲ. プラン問題と宇野「三段階論」

宇野弘蔵氏の経済学研究における三段階分化の主張、いわゆる〈三段階論〉は、もともと「プラン問題」に対する方法論的アンチテーゼとして提示されていた（『経済学の方法』について 1950年、『資本論』における恐慌理論の難点 1952年）が、これをむしろ〈『資本論』三部門説〉の「代表」として「問題」の枠内に位置づけたのは、遊部久蔵「プラン問題」（『資本論研究史』ミネルヴァ書房、1958年、202頁）であった。それが誤った評価であることは、『（経済学ゼミナール）経済学の方法』（法大出版局1963年3—8頁）における宇野氏の発言をみれば歴然としている。

宇野氏においては、もともとマルクスのプランが「本来如何なるものを意図したものであるか否かには関係な」かったからである。むしろ〈三段階論〉の主張は、とりわけ「原理論」に関する主張は、ある評者の表現を借りれば、「原理論の展開に当たってマルクスはプランを変更し、放棄したのであって、残された対象はすべて段階論ないし現状分析」に属するという

意味において「プランの放棄説」といってもよい（木下悦二『『資本論』と後半体系』、『資本論体系』第8巻，有斐閣 1985年，10ページ）。宇野氏の方法は、「純粹の資本主義」＝「あるべき原理像」という先驗的立場から『資本論』を見直し「原理論として純化」しようとするものであって、具体的表象の概念（理論）化に関するマルクスの「科学的に正しい方法」とは、まったく異質であり、その意味においても、初めから「プラン」とは無縁であった。

ところで、〈宇野経済学〉と異なる立場からも、現代における『資本論』の継承発展のためには、『『プラン』の亡霊は、しかるべく払いのけた方がいい』（本間要一郎『『資本論』と『帝国主義論』』、『経済評論』第22巻⑫，1967年，32ページ）とか、いわゆる『『プラン問題』が、マルクス経済学の発展を阻止する呪縛になっていた…。ここに、きっぱりと『プラン』は切ってしまったほうがよい』（入江節次郎，同志社大人文研『帝国主義論の方法』1969年，250ページ）という主張さえ打ち出されていた。宇野「三段階論」とともに、これらの主張は「経済学批判プラン」とその基礎にあったマルクス自身の「経済学の方法」に対する否定という点においては共通するものといわざるをえない。

では、プラン問題の成果は何か。この点を「プラン問題の諸見解」を整理して自説を展開した一論考を例に、検討してみたい。

IV. プラン問題の成果

II 2. 再展開期に見た佐藤金三郎『『経済学批判』体系と『資本論』—『経済学批判要綱』を中心として』（1954年）の登場以後「30年以上」を経て、「基本的にこれを越える見解はない」と「顕揚」するために、「プラン問題をめぐる諸見解」を「鳥瞰」した一論考は⁽⁵⁾、佐藤氏のものを含め11の諸説に整理分類している。

A. プラン不変＝前半3部説；福本和男

B. 当初プラン廃棄＝プラン交替説；グロスマン，ベーレンス

- C. プラン不変=資本一般説；久留間鮎造，宮本義男，コーガン，大村泉
- D. 前半3部=後半体系存続説；藤塚知義，原田三郎，高木幸二郎
- E. 範疇的な意味での資本一般=後続諸テーマ両極分解説；佐藤金三郎，ミュラーも類似の見解
- F. 『資本論』=「純化された資本一般」；高須賀義博
- G. ⁽⁶⁾ プラン変更=前半3部説；ロスドルスキー
- H. 資本一般と後続諸テーマの「混淆」説；田中菊次
- I. プラン変更=資本一般説；シュヴァルツ
- J. 宇野弘蔵氏の見解，「宇野氏自身には『プラン問題』を正面から問題とした研究は存在せず，変更の有無・『資本論』の対象領域に関しての確定もない。」⁽⁷⁾

K. プラン変更=前半3部=後半3部廃棄説；鈴木鴻一郎，岩田弘

上のように分類したこの論者は，「〈資本一般説〉と〈前半3部説〉との止揚という論点を提示しプラン論争史上においても時代を画した」と高く評価する佐藤見解を検討したうえで結論する。「当初の『経済学批判』プランは，『資本論』段階においては，もはや，有機的構造をもった〈経済学批判体系〉[と]して存続していたと考えることは到底できない」⁽⁸⁾，と。これは，佐藤氏の「経済学批判プラン」は「『資本論』においてすでに発展的に解消したものとみなすべきであろう」という主張⁽⁹⁾の別様の表現とみてよからう。

〈「経済学批判プラン」の発展的解消〉の確認，これが「プラン問題」の成果だとすればなんと不毛な議論であろうか。

むしろ，プラン問題に学ぶべきは，当初の「経済学批判プラン」を方法的指針として，進捗していく『経済学批判要綱』・『剰余価値学説史』・『資本論』の各段階ごとに，「経済学の要綱」あるいは「経済学の原理」，さらには「資本一般」（これらはほぼ同一）を中心とする仕上げの過程において，内容的な発展，拡充，深化が遂げられ，したがってそうした内容の変

更を伴いつつ現行『資本論』の「資本の一般的分析」が成立したという事実である。それは、プランの廃棄や発展的解消とは対極的に、プランを指針とした結果に他ならない。この意味において、上の分類でいう「C.プラン不変＝資本一般説」が、正確には、プラン不変＝「資本一般」内容の拡充・深化説が、妥当であり、プラン上向体系の方法論的有意性は動かないといわねばならない。

むすびに

プラン問題の起点（久留間）論文が、未完成のままに残された経済学批判体系とともにマルクスの恐慌論を完成すべきとし、「帝国主義論は恐慌論の発展でなければならぬ」としたのも⁽¹⁰⁾、別の論者がプランの所定の範囲のうちに帝国主義論を含む16世紀から現代までの資本主義発展過程をも適宜位置づける⁽¹¹⁾としたのも、具体的表象の概念化に関するマルクスの「科学的に正しい方法」、すなわち「抽象的なものから具体的なものへと上向する方法」＝上向法に基づいて構想された「経済学批判プラン」に経済学研究の方法論的指針を求めたからに他ならない。

プラン問題の意義は、何よりも『資本論』の具体化を目指して現実分析の方法を模索した点に認められるのであって、この観点なしの「プラン問題」は無意味といつてよいであろう。実際の論議の展開は、文献考証の面では多くの成果を残したとはいえ、後半体系についてはある程度の積極論をもたらしたが⁽¹²⁾、本来の期待された成果はあまりに乏しかったということを再度確認して稿を閉じたい。

注

- (1) F.エンゲルス[書評]「カール・マルクス著『経済学批判』」, 「マルクスは、ヘーゲルの論理学の殻をやぶって、そのなかから、この領域におけるヘーゲルの真の発見を含んでいる核をとりだし、かつ弁証法的方法からその観念論的ところもはぎとって、思想の唯一の正しい形態となるような簡単な姿にそれを立てなおす、という仕事を引きうけることのできたただ一人のひとであったし、現在でもなおそうである。マルクスの経済学批判の根

底にある方法があみだされたことは、その意義からいって、唯物論的な基本的考え方に少しも劣らないひとつの結果だと、われわれは考える。」Marx-Engels Werke Bd. 13, Dietz Verl., 1961, S. 474. 武田隆夫他訳『経済学批判』岩波文庫, 1956年, 「付録一」264ページ。

- (2) 久留間起点論作の「執筆動機」をなしたH.グロスマンの方法論的問題提起(彼自身が「従来一度も提起されることのなかった根本問題を初めて科学的マルクス研究の領域に引きだした」と自負する)そのものの検討としては、拙稿「『資本論』具体化をめぐるH.グロスマンの方法論的問題提起—いわゆる「プラン問題」の性格づけのために」、(北海道大学『経済学研究』第23巻第3号, 1973年11月)を参看されたい。

なお、近年のグロスマン再評価として、Rick Kuhn, *Henryk Grossman and the Recovery of Marxism*, University of Illinois Press, Urbana and Chicago 2007という浩瀚な伝記がでた。また、その略伝は、拙著『増補恐慌論史序説』梓出版社 1984年, 139-40ページを参照されたい。

- (3) 佐藤金三郎『『資本論』と宇野経済学』新評論 1968年, 25ページ。
 (4) *Grundrisse.*, S. 21, *MEGA* II/1. 1, S. 36.
 (5) 青才高志「プラン問題をめぐる諸見解—佐藤金三郎氏の死を悼んで」、信州大学『経済学論集』第28号, 1991年, 63ページ。
 (6) 同上, 66ページではC.と誤記されているので、訂正した。
 (7) 同上, 67ページ。
 (8) 同上, 84ページ。引用に際し [] 内の脱字を補った。
 (9) 佐藤金三郎『『経済学批判』体系と『資本論』—『経済学批判要綱』を中心として』『経済学雑誌』第31巻第5・6号, 1954年, 58ページ。
 (10) 久留間鮫造『増補新版恐慌論研究』1965年, 大月書店 1965年, 37ページ。
 (11) 宮崎犀一『経済原論の方法』上, 未来社 1970年, 156ページ, 356-7ページ。
 (12) これについては、佐々木隆生「『経済学批判』のプラン後半体系をめぐる論争」『資本論体系』第8巻, 有斐閣 1985年, 318-332ページ。また、プランが現代資本主義分析の指針となる例示として、村岡俊三「現代のグローバル化と帝国主義」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第50号, 八潮社 2009年1月。

プラン問題を意識した現状分析の一例として、拙稿「資本主義発展段階におけるグローバル化の歴史的位罫」『経済志林』第77巻第2号を参照されたい。